

### 3 近世後期上田藩上塩尻村の村落構造と蚕種商人

#### —日本における市場経済の形成と村落社会—

東北大学 長谷部 弘

上田藩上塩尻村は、近世後期以降蚕種商人を大量に輩出した村としてよく知られている。蚕種取引は、養蚕業が東日本の農村地域一帯に広まるとともに拡大した養蚕関連の市場分野であった。その市場が拡大しはじめる一八世紀半ば以降は、近世の経済社会が市場経済へと転換し始める「宝暦?天明期」にはほぼ一致している。上塩尻村では、明和年間の数十名から文化年間の一〇〇名前後にまで蚕種商人の数がうなぎのぼりに増大した。

ところで、残存する宗門人別帳をみると、上塩尻村の「家」数は、一八世紀半ば以降幕末期にいたるまで、公的には七五軒前後で大きな変化をみせないが、実際には人口数の増加とともに九〇軒前後から一三〇軒前後へと増加をみせる。そのような人口と家数の増加は、養蚕・蚕種取引による「家産」の増大やそれを背景とした「分家」の増大などと密接なかかわりを持つ。また、このような人口や家数の増加は、独立した「世帯」の数が増えたことを単純に意味するわけではない。「家」は村内部で、経済的な必要（労働力配分、土地貸借、共有山林の管理、「連」を通じた取引の相互協力、「講」や土地抵当金融を通じた資金の融通など）や、生活上の必要（冠婚葬祭、宗教、娯楽その他）、そして村内の紛争処理の必要など、さまざまな理由で多様な結びつきで見えるからである。

同村には、同一の祖先を持つ家連合としての「同族」がある。彼らは「姓」を一つにするが、「姓」が同じであっても同一の同族とは限らない。上塩尻村では「同族」を「マケ」ないし「クルワ」と呼んでいたようであり、主要なものとして、佐藤、山崎、清水（3系統）、馬場、西原（原）、塚田（滝沢）といった同族の存在が確認できる。同族結合は、中心となる祖先直系の「本家」と、そこから独立した複数の「分家」から成立している。主に冠婚葬祭や祖先を祭る祭礼において結束するケースが多いが、経済生活の分野では必ずしも結束するとは限らない。ただし、上塩尻村の事例では、古くから養蚕を行っている上層の有力蚕種商人の家々は、その家業の運営に際して同族団としての結束が堅い。これは蚕種の取引を行うために必要な養蚕技術、資金、信用が、同族の名前や家業と結びついているからだろうと考えられる。

本報告では、まず、この蚕種商人達の取引活動に特徴的な仲間組織の機能や構造がどのようなものであったのかについて、寛政年間につくられた「神明講」を事例に検討してみる。さらに、その「神明講」の中心的なメンバーとなった上塩尻村の蚕種商人達に焦点をあてて、彼らの蚕種の取引活動がどのような内容を持っていたのかを明らかにする。そして最後に、そのような蚕種商人達の取引活動を背後で支えていた上塩尻村の村落構造について、村内のさまざまな中間的組織との関わらせながら明らかにしてみたい。

E-mail: hhasebe@econ.tohoku.ac.jp